

小児腎炎の病態病理に関する研究 — まとめ —

重松 秀一

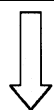
信州大学医学部病理学教室

この研究班では実験腎炎を用いた基礎的研究、臨床面における病態病理の把握から腎疾患の病態、発生、進展、治癒、さらに治療効果などについての研究をめざしている。

柴田班員は糸球体係蹄壁を構成する基底膜解析で微量ながら腎炎惹起性のコラーゲン類似の糖ペプチド（ネフリトジェノサイト）の存在を指摘した。この物質は抗腎抗体としての抗原活性はないがこれ自身が萎縮腎に至る腎炎惹起性をもつ。その化学構造も判明し全合成も間近と考えられるが、このような体内に存在する腎炎惹起物質の遊出機序、拮抗物質の探究など今後に残された問題も多い。馬杉班員はレンズ被膜Ⅳ型コラーゲンを抗原として羊に抗体を作製、各系のマウスに投与した所 ddY 系のマウスに優位にメサングウムに IgA 沈着のある糸球体炎を惹起させた。この実験はヒト IgA 腎症のモデルの可能性を有しており、又腎病変への遺伝的背景をも示唆する所が多い。鈴木班員はコクサッキー B 4 ウイルスをマウスに接種することにより IgA の沈着をみるメサングウム増殖性腎炎を惹起した。IgA 腎症のモデルの可能性とともにウイルス感染と IgA 腎症との関連をも示唆する実験といえる。山口班員は加齢と性別が腎炎惹起及び腎機能に及ぼす影響の基礎的解析を行った。抗糸球体基底膜抗体投与によって幼年ラットは青壮年にくらべ抗体の基底膜結合性がわるく、一方雄の幼年ラットは青年ラットに比して糸球体濾過能の低下をみた。糸球体炎発症因子の一つとしての問題を提示している。木原班員は糸球体の硬化荒廃に至るプロセスの研究で、SHR ラットを牛血清アルブミンで感作するこ

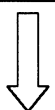
とにより半月体形成、癒着を高率におこし得、糸球体荒廃への関与を把握した。即ち癒着成立にはボウマン嚢上皮細胞が糸球体基底膜上皮側の部分的剥離部を覆い、ボウマン嚢基底膜に接統する細胞外成分を作る過程が重要とみられた。この所見はヒトの巣状硬化病変の形成過程と共通するものであり、慢性化の進展形態所見として注目すべきものであろう。

坂口班員は小児、成人の 7 例の急性間質性腎炎の病理学的検討を行った。その結果、浮腫状線維化型と細胞浸潤型とに 2 大別した。前者では尿細管基底膜の菲薄化や断裂が特徴的にみられるが、その意味づけは今後の検討にまたれる。また 2 つの組織型の相関の検討も必要であろう。種々の薬剤による間質性腎炎の増加に鑑み経時的な組織変化の把握が望まれる。河西班員は紫斑病性腎炎患児について C1q 法と血小板凝集テストで血中免疫複合体を検討し、後者での検出が有意であるとの結果をえた。また血漿交換療法を行った患児では血小板法での値が血漿交換により低下し C1q 法と対照的であった。血小板法でのデータの血漿交換療法導入への一つの指標としての意義を示唆した。藤沢班員は急性糸球体腎炎における溶連菌細胞膜抗原の関与を明らかにするため溶連菌細胞膜抗原を分析した。現在この抗原を認識する 15 種のモノクロナル抗体を作成し、4 種の細胞膜抗原を同定できた。重松班員はステロイド効果をラット血清病腎炎で検討した。腎炎発症阻止には至らずしかし糸球体炎の軽減化がみられ、免疫複合体の性状の変化による組織像の膜性腎症型への変貌がみられた。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



小児腎炎の病態病理に関する研究—まとめ—

重松秀一

信州大学医学部病理学教室

この研究班では実験腎炎を用いた基礎的研究,臨床面における病態病理の把握から腎疾患の病態,発生,進展,治癒さらに治療効果などについての研究をめざしている。

柴田班員は糸球体係蹄壁を構成する基底膜解析で微量ながら腎炎惹起性のコラゲン類似の糖ペプチド(ネフリトジェノサイト)の存在を指摘した。この物質は抗腎抗体としての抗原活性はないがこれ自身が萎縮腎に至る腎炎惹起性をもつ。その化学構造も判明し全合成も間近と考えられるが,このような体内に存在する腎炎惹起物質の遊出機序,拮抗物質の探究など今後に残された問題も多い。馬杉班員はレンズ被膜 型コラゲンを抗原として羊に抗体を作製,各系のマウスに投与した所 ddY 系のマウスに優位にメサングウムに IgA 沈着のある糸球体炎を惹起させえた。この実験はヒト IgA 腎症のモデルの可能性を有しており,又腎病変への遺伝的背景をも示唆する所が多い。鈴木班員はコクサッキー B4 ウィルスをマウスに接種することにより IgA の沈着をみるメサングウム増殖性腎炎を惹起しえた。IgA 腎症のモデルの可能性とともにウイルス感染と IgA 腎症との関連をも示唆する実験といえる。山口班員は加齢と性別が腎炎惹起及び腎機能に及ぼす影響の基礎的解析を行った。抗糸球体基底膜抗体投与によって幼年ラットは青壮年にくらべ抗体の基底膜結合性がわるく,一方雄の幼年ラットは青年ラットに比して糸球体濾過能の低下をみた。糸球体炎発症因子の一つとしての問題を提示している。木原班員は糸球体の硬化荒廃に至るプロセスの研究で,SHR ラットを牛血清アルブミンで感作することにより半月体形成,癒着を高率におこし得,糸球体荒廃への関与を把握した。即ち癒着成立にはボウマン囊上皮細胞が糸球体基底膜上皮側の部分的剥離部を覆い,ボウマン囊基底膜に接統する細胞外成分を作る過程が重要とみられた。この所見はヒトの巣状硬化病変の形成過程と共通するものであり,慢性化の進展形態所見として注目すべきものであろう。

坂口班員は小児成人の 7 例の急性間質性腎炎の病理学的検討を行った。その結果,浮腫状線維化型と細胞浸潤型とに 2 大別しえた。前者では尿細管基底膜の菲薄化や断裂が特徴的に

みられるが、その意味づけは今後の検討にまたれる。また 2 つの組織型の相関の検討も必要であろう。種々の薬剤による間質性腎炎の増加に鑑み経時的な組織変化の把握が望まれる。河西班員は紫斑病性腎炎患児について Clq 法と血小板凝集テストで血中免疫複合体を検討し、後者での検出が有意であるとの結果をえた。また血漿交換療法を行った患児では血小板法での値が血漿交換により低下し Clq 法と対照的であった。血小板法でのデータの血漿交換療法導入への一つの指標としての意義を示唆した。藤沢班員は急性糸球体腎炎における溶連菌細胞膜抗原の関与を明らかにするため溶連菌細胞膜抗原を分析した。現在この抗原を認識する 15 種のモノクロナル抗体を作成しえ、4 種の細胞膜抗原を同定できた。重松班員はステロイド効果をラット血清病腎炎で検討した。腎炎発症阻止には至らずしかし糸球体炎の軽減化がみられ、免疫複合体の性状の変化による組織像の膜性腎症型への変貌がみられた。